
はえ氏の証言

じく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はえ氏の証言

【Nコード】

N0729J

【作者名】

じく

【あらすじ】

名もないハエ（♀）が恋するのは、どこにでもいるごく普通の人間の女性。

「うおるあああっ!」

「私は彼女のすべてが好きだ」

「なあ、これっ……」

ヤバいんじゃないか？」

人間に恋するハエの日常。

はえ氏の証言

「うおるあああっ！」

女性の凄まじい雄叫びとともに、ばしんっ！ と、これまた凄味のある音が響いた。

女性が放ったその攻撃を紙一重でかわし、私は壁掛け時計の裏へと俊敏な動きで避難する。

彼女は私が時計裏へ潜り込んだことに気付いていないようだ。私を捜して暫し部屋をうろつき見回した後、ふうと息を洩らして、納得がいかないといった様子で退室する。

それをしっかりと見届けて目に焼き付けて、私は、ほうと安堵の息を吐き、力なく時計の留め具に腰を下ろした。

今の騒ぎは、ソファの上でうとうとしていた私を、この部屋の住人である彼女が見つけ、私を殺——もとい、退治しようとして起こったものだ。

右手に新聞紙を丸めた凶器を、左手に殺虫剤を装備した彼女に追いつけまわされ、逃げて逃げて翹が休息を求めてきたので、私は近くの壁にとまり、体力を回復しようとした。

そこに、凄まじい雄叫びをお供にして、新聞紙の凶器を振り上げた彼女が突っ込んできたのだ。

そして、私めがけてそれを振り下ろした。
……そうして、今に至る。

私はハエだ。

ナマモノや、ゴミにたかるあのハエだ。
しかしハエとはいえど、汚いものだけに寄るのではない。
花や、美しいものにも寄って行く。……これは私だけか？

さきのような騒ぎは日常茶飯事。

一ヶ月ほど前、私の彼女の闘い（？）の巻き添えを食らった親子が、
彼女のもつ殺虫剤の餌食になった。
ショックで四日寝込んだ。

後日、手土産を持って謝りに行った。

最近では一週間ほど前。

部屋を探検中の少年が、彼女が暑さ凌ぎに扇いでいたウチワの突風に飛ばされて行方不明になった。
彼は、今も見付かっていない。

そんなことがあったものだから、身の危険を感じてこの家から出ていった仲間は数しれず。

本来なら私も早々に此処から退散すべきなのだが、私には、此処を離れることの出来ぬ理由がある。

この家の住人である彼女の名前はミライ、年齢は19歳。
私を知っているのは、この二つだけだ。

私は……彼女に恋をしている。

はえ氏の日常

彼女が、部屋に戻ってきた。

薄着に一枚上着を羽織り、高価そうなバッグを持っている。外出するのだろう。

彼女の足元にまわりつく影が目についた。そちらに視線を向ける。

それは栗色の小型犬だった。

ぺたんと垂れた耳に、前に突きだした鼻。くりくり丸い、つぶらな瞳。

ご機嫌に尻尾を揺らしている。

——マツシュ。そんな名前の、オスの小型犬。

「それじゃあマツシュ、行ってくるからねえ」

彼女は床に膝をつき、犬の腰に手をまわした。

そうしてその鼻面に、艶やかな桃色の唇を近付ける。

犬はまんざらでもないようだ。

低温の炎にも似た感情に支配された私は、『それ』が見えないよう両手で顔面を覆いながら、顔をそらした。

嗚呼……

羨ましいっ……………！

永遠にも似た『その』ときが過ぎ、彼女は立ち上がった。

「それじゃマツシュ、ばいばい」そう言って、部屋を後にする。時計の陰から彼女を見ると玄関の扉を開けて、出ていくところだった。

扉が閉まり、この家の住人がいなくなると、犬は私に話しかけてきた。

「おめえ、そこでなにやってんだああ？」

細かい糸の集合体にも似た尾をはたはたと振り、にやつきながら犬が言った。

私は時計裏から抜け出し、時計本体に腰を下ろした。

「ミライのヤツ、友達と遊ぶんだと」訊いてもいないのに、犬が発言した。

「どうよ？」

「なにがだ」

「ミライの言う『友達』ってのは、男だ。オスだ。

昨日、寝る前に言ってたぜええ。

『明日、彼と遊ぶんだー』ってな。

さっきだって、すげえ気合い入れてめかしこんでた。

あれは女友達と遊ぶときの比じゃあねえよ」

軽やかな身のこなしで、ソファに飛び乗ると、犬は腹這いに寝そべった。

『伏せ』の格好だ。

「それが、どうした？」

なにが言いたい」

「あきらめなあ」

言葉尻に悪意を込めた口調で、ゆっくりゆっくり。犬は愉しそうに尻尾を揺らして。

「おめえ、ミライのことが好きなんだろう？

無理無理。とつと諦めちまいなあ。

だつておめえ、ムシじゃねえかあ。

それも汚くて、不衛生なハエ」

それは百も承知だ。

私がムシでなくヒトであればと思ったことは、三度や五度ではきかない。

「仮におめえが人間だったとしても、無理なハナシだつてえの。

ミライには、もう付き合ってるヤツがいるからなあ」

「そんな、ことは……」

私の中に、奇妙な敗北感とやるせなさがドツとなだれ込んでくる。体の内側で、それらの思いがじわじわ勢力を拡大し、ゼリー状に固まっていく。

「……わかっているぞ」

……わかっている、つもりだ。

彼女には、彼女と同じ人間の恋人がいる。それは私も知っている。

彼女はよく、その彼を家に連れて来るから。

それはわかっている。
理解……している。

既知の事実だからこそ、それを指摘されて心が揺らぐのだ。

「あ、そーだ」

何か思い出したかのように、犬がつと顔を上げた。

「昨日、ミライがケーキを買っていたんだ。

……一緒に食おうぜえ」

「……ケーキは犬には毒なんじゃないのか？」

「うるっせえなあ」

そう言っただけは立ち上がり、床に降りた後、ぶるぶると体を振るわせた。

「おめえも来るか？」

「っていうか、来なあ。」

「ケーキの隠し場所なら知ってるぜえ」

「……そもそも、それはお前のものではないだろう。」

「彼女が、楽しみに取っておいてるものなんじゃないのか」

「良いから良いから！」

「気にすんなよ、そんなん。」

「ハエが遠慮するなんて聞いたことがねえ」

「……何てヤツだ。」

犬がキッチンの戸棚から四角い、真っ白な箱を引っ張ってきた。鼻を駆使して、器用なものだ、蓋をいとも簡単に開ける。

渦巻き状の黄金色のクリーム为天辺に、ちょこんと栗が一粒乗っている。

こんがり焼かれた土台が、独特な形状の薄い紙に包まれている。これは確か、モンブランといったな。

淡い黄色の土台にクリームとイチゴが練りこまれ、雪化粧を施し、その上にイチゴが乗っている。これはショートケーキか。

箱の中には、モンブランが五つと、ショートケーキが三つ入っていた。

ごくり。犬の喉になる。

「よっしゃ、食うぜえ!」

もうこの犬に何を言ったって無駄だ。そう学習した私は、椅子の背持たれにとまり、事態を静観することにした。

「どうなっても知らないからな」
目をきらきらさせて、箱に顔をうずめる犬。

室内に、咀嚼の音と、時計がときを刻む音だけが響いている。

「モンブラン、うめー」

「そうか良かったな」

ほぼ棒読みで、私は返した。

犬は三個目に口をつける。

因みに、ケーキを食べたことにより犬がかなりタチの悪い体調不良を起こし、動物病院送りになったのは言うまでもない。

「おめえよお、ミライのどこが好きなんだ？」

ケーキの件から暫くたつたある日。

すっかり元気になった犬が私に訊いてきた。

「わかんねえんだよなあ。

どこが良いんだ？」

超狂暴になるじゃねえか、おめえを見付けると」

「それは、そうだが……」

「正直、おっかなくねえのかあ？」

——恐くないといったら嘘になる。

彼女が持つ新聞紙の武器は人間や犬には大したものでもなく、少なくとも私にとってアレは、強力な鈍器だ。

殺虫剤だってそうだ。

あれは毒にも等しい。

そんなものを振り回されたら……生きた心地がしない。

それらを振り回して私を追い掛ける彼女の姿は、正直……おぞまし

くもある。

実際、目にも止まらぬ速さで攻撃を繰り出して来るのだ。

今、こうして生きていられるのは、私がとてつもない強運の持ち主だからだろう。

そのぶん、凶運も強いと思うが……。

「何か、反応しろよなあ」

黙りこんだ私へ、犬が不機嫌そうに言った。

私は考えをまとめ、先ほどの『おっかなくないのか』という問いに答える。

「……確かに、彼女に見付けるとゾツとするよ。
命の危機だからな……。」

でも、それと同時に、嬉しいんだ」

「なんか、おかしくねえかあ？」

私は息を吐き、薄く笑みを浮かべる。

「おかしい。そう思ってくれても構わんさ、私は……」

そついう面もひっくるめた彼女の全てが好きなんだ」

犬がへっという表情で、顔をそらした。

「言つてて、恥ずかしくねえのか？」

ハエのくせに」

「聞いてて、恥ずかしいのか？
イヌのくせに」

ふんつと鼻を鳴らす犬。

彼は立ち上がり、こんな言葉を残して、この場を去っていった。

「おめえなんかとつとミライに潰されちまえー！」

犬の捨て台詞に苦笑し、私は、私以外誰もいなかった部屋で、ス
ウと気持ちを落ち着かせる。

私は、彼女が好きだ。

ハエとヒトで種族は違えど、私は彼女のことを愛している。

最近になって、思う。

彼女に見付かり、武器を手追い掛け回されたからといって、逃げ
る必要はないのではないか？

最近になって思う。

ここ最近になって、思う。

彼女になら、殺されてしまっても良いかもしれない。

はえ氏の暗転

近頃、彼女の涙を頻繁に見るようになった。

犬が聞いたことによると、彼女は最近、男の交際が上手くいっていないのだという。

「嬉しいだろ？」

彼女の涙を見たくない。

彼女の泣き声を聞きたくない。

玄関扉の下部に設置されたの動物専用ドアから、私と犬は外に出た。

玄関先のポーチに腹這いに寝そべった犬が、そう言った。

「どういうことだ」

「ミライが言っていたんだよ。」

もう、男と別れるって。

おめえにとって最も邪魔なヤツがいなくなるんだぜ。

嬉しくねえのかああ？」

——答えられない。

それが……男との亀裂が原因で、彼女が涙している。

そんなの、嬉しいわけがない。

だが、狂喜乱舞とはいかずとも、彼らの不仲を喜ぶ自分がいるのもまた事実だ。

私はうつ向いて、ギュツと口をつぐんだ。

「もお良い」

犬がぶふうと息を吐く。

私は犬を見ずに、きつく目を閉じた。

「……………」

私は犬と、二人して黙りこむ。

あまりに静かなものだから静寂の音が聞こえる気がした。

「……そろそろ、中に入るか」

ぼつりと犬が洩らした。

私はその場で翅を羽ばたかせ、勢いをつけて地面を蹴った。

翌日。

私は部屋の隅に蹲り、体をちぢこませていた。

床には、点々と目に鮮やかな染み——血だ。

私は、ついさっきこの部屋で起こった出来事を思いだし、身を震わせた。

きっかけは……彼女の言葉。

『別れましょう』

空が赤く色付き始めた頃に彼女は男を呼び出した。
彼との交際を解消するためだ。

彼女は男を室内に招き入れ、居間に通した。

私は犬と二人、居間の隣室にあたる座敷で、なにも喋らず、ただ黙っていた。

犬もどこかうつ向きかげんで、無言であつた。

居間と座敷を切り離す薄い境界線ごしに、私はビリビリとした緊張感を、背中ごしに感じていた。

一体どれほどの沈黙が駆け抜けただろうか。

音と声のない空間に、彼女の声が流れた。

「言いたいことがあるの。」

別れましょう」

——まるでそれが合図であり、最初から打ち合わせていたかのよう
うに。

次の瞬間、男が声を張って何かを叫んだ。

よほど頭に血が登ったのか興奮しているのか、それは早口で、聞き
取れない。

だが。

「なあ、これっ……」

ヤバいんじゃないか？」

「……。ああ」

私と犬が事態の深刻さをはかるには、十二分に事足りた。

座敷の入り口——ふすまに僅かな隙間が開いているのを、犬はめざとくも見付けた。

そこに鼻を差し入れ、力ずくでこじあける。

「！」

男が拳を握り締め、彼女の襟首を掴み上げていた。
まずい……！

そのときだった。

座敷から飛び出した犬が男に突進し、その左足首に噛みついたのは。

犬が噛みついたことで、男の顔が痛みに歪んだ。
拳が解かれ、襟首から手が離れる。

犬は彼女を救うことに成功した。
しかし……。

雑言を吐き出した男は、犬の牙が突き刺さった足を乱暴に振り払う。

犬が男の足から離れ投げ出され、居間の床を滑った。

「やだ、マツシュ！」

悲鳴にも似た声をあげ、彼女が犬に駆け寄る。
犬が気掛かりで、最早男など眼中にないのか。

ぴくりとも動かない犬を抱き上げて、彼女は家を飛び出した。

強制的に喧嘩を終了させられた男は、そこらのものにあたりちらして、家を出た。

そして大きな部屋にひとり残された私は、今目の前で確かに繰り広げられた出来事の恐怖から、体が震えて動けずにいた。

あれから、どれほどの時間が流れただろうか。
鮮やかな色を放っていた空は今は群青に染まり、星と月で着飾っている。

彼女の危機に、何も出来なかった。

犬が飛び出していったあのときだって、ただ見ていることしか出来なかった。

私の力など、彼女やあの男、犬にとっては皆無に等しいだろう。

それでも……

それでも…… なにか、私にだって、やれることがあった筈なんだ。

そんなことすら考えられずに。

何が、“好き”だ。

「情けない……」

思わず、声が洩れた。

自分の無力さが、ほとほと嫌になる。

嫌になつて、腹が立つ。

——玄関の扉が開く音がした。

マツシュ、大丈夫？ と、聞きなれた声が聴こえてくる。

彼女が帰ってきた……！

私は、彼女と犬をみやった。

彼女は此方に背を向け、ソファの足元に跪いていた。

ソファには丸く柔らかそうなクッションが敷かれ、犬がそれを枕にしていた。

犬の体が規則的に、確かな呼吸を刻んでいる。

ずくと、胸が痛んだ。

ハエなんだから、ムシなんだから、人間の胸とは違つだろつに。そんなことが頭をよぎつたが、すぐにどこかへ流れ去つた。

私は頭を振るい、顔面を両手で覆つた。

みていられない……！

……彼らに合わせる顔がない。

何も出来ずに動けなかった、彼女の……犬の、危機に私は何も出来なかった。

その光景の恐ろしさから、全身が床に縫いとめられた。

本当に恐ろしかったのは、男と対峙した彼女と犬だった筈なのに。

私は、かげから見守ることしか出来ない。

彼らの頭を撫で、側に寄り添って、安心させることさえ出来ないく
せに。

——もう、今回のようなことが起こりませんよう。

私は透明な涙を流し、その感情に溺れた。

やがて群青の夜は明け、澄みきった青の朝がやってくる。

はえ氏の結末

数日後、犬は何事もなかったかのように全快した。
今では憎たらしいほどに、怪我をする前よりも元気になっている。

これは後で知ったことだが、彼女と男の破局の元々の原因は、男の浮気だったのだそうだ。

「おめえ、俺が怪我して心配したろ？ ええ？
恥ずかしがらずに言えよおう！」

肉きゆうで私の頭をしばしばし叩きながら、犬が言った。

……ああ、鬱陶しい！

怒りでひくつきながら、私は低い声を出す。

「……知ってるか？」

ハエは病原菌の宝庫なんだぞ」

「んで？」

「いい加減にしないと、お前の体に病原菌をばらまくぞ」

うは、怖っえー！

言いながら、尻尾を振り回す犬。

「あっ」

突然、犬が何かに気付いたかのような声をあげた。
頭を叩く手が止まる。

「？ どうしたんだ」

「おめえ……後ろ」

後ろ？

なんだろう……なんだか、寒気がするような。

私は振り向く。

そこには、鬼のような形相の彼女がいた。
その手にはハエ叩き。

「……逃げっ……」私は飛び立つ。「な、きゃ」

獲物をとらえたハエ叩きが、私めがけて振り下ろされて、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0729j/>

はえ氏の証言

2010年10月15日20時44分発行